タンバグモの會合に就いて

小　松　敏　宏

長野縣諏訪郡北山村湯川區

T. Komatsu. On the Copulation of a Thomisid spider, *Pistius truncatus* (Pallas)

Resume

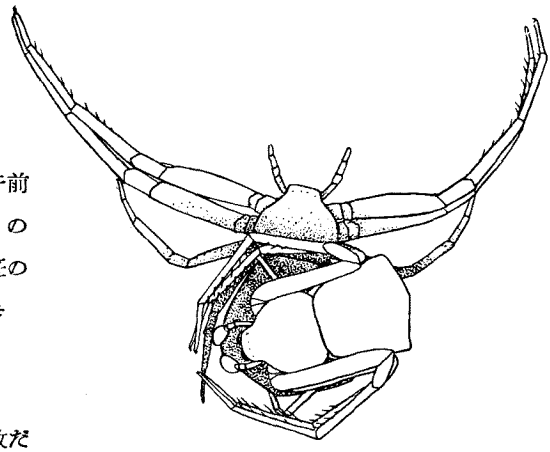
1. 1937年6月1日午前11時30分頃 *Pistius truncatus* の♂が亞成體の♀の腹部背面に蹲つてゐるのを採集した。其の mating-ride は2日午後9時20分まで採集時より起算して33時50分間繼續した。

2. ♀の脫皮は2日午後6時30分頃行はれ、交際も其際行はれた。

觀　察　記

1937年6月1日の午前11時30分頃，日あたりの良い道傍の傾斜した笹の葉の上でタンバグモ *Pistius truncatus* (Pallas) をみつけた。

簇つた笹の葉が一枚だけ拔出して，多少樋狀を呈してゐる表面に，成體



タンバグモ *Pistius truncatus* (Pallas) ノ♂ガ♀ノ腹部ニ蹲ツテヰル狀

としては小さすぎると信ぜられる♀と，同種の明に成熟した♂——♀よりづつと濃色な，が前者の腹部背面に陣取つて大平さうに蹲つてゐるではないか。

今まで♀は折々採集した經驗はあるが，♂は最初でもあり，異様な有様であつたから暫く注視したが，急激な變化も無さそうでもあり，野外教授の最中だつたので餘裕がない。其儘管瓶に葉と共に幽閉して置いて，正午頃持歸つて今度は大型の管瓶（口徑 40cm 高さ 80cm ）の內に移した。相當入念に作業が行はれたとは謂へ蜘蛛達が其儘の體型でゐたのは不思議であつた。

ところが♀は午後三時頃から徐々に♂を背負つたまゝ彷ひ始めて硝子壁にのぼつて來た。epigyne をみると——この種はやゝ見分け難いが，確に亞成體の♀である。そこで出來るたけ永續的な觀察をしやうと決心した。

♀は遲鈍な動作でコルク栓の下面へ攀ぢ，笹の葉へ戻つたりし乍ら所々に靜止して前二對脚を開いて，蟲の來るのを待つかにみられた。♂は♀の腹部上面から決して下りず，前脚もぐつとまげて全くの休養的態度をもつて終始してゐる。尤も時々坐る方角はかえられて，時にはの縱の軸に對して橫位をとり，一致し，逆になる等の事はあつた。

背上の♂は食事をどうするか。♀の饗宴に參加するや否やは，翅を拷つた蠅を一匹與へて置いたが最後まで手をつけられずに終り，解決に至らなかつた。

2 日の午後 2 時30分頃，寫眞を撮る爲に鉢植のイハカヾミに蜘蛛を放したが其際は取扱ひが亂暴で，床も絕えず振動してゐた爲か♂が二度まで逃出して仕舞つた。然し絹絲を摑んで♂を吊して♀のところへもつて行つてやると，早速所定の位置に移行して蹲る。♀も全然反抗せず，逃げても戻つても無關心でゐるのは注目に價した。尙，♀の腹部へ♂は附着板を作らず，第三第四步脚でつかまつてゐる事が認められた。又一回は誤つて♀が地面に仰向に落た際は，♂は♀の下敷になつた儘，ぢつと辛棒してゐた。

適當な位置に♀が靜止して，シヤツターをといふ時，突然♂が立上つたので何事ぞと凝視すると，用便を足して再び不動の狀態に返つたのは莞爾？たらさ

るを得なかつた。

6 月 2 日は午後 6 時30分頃まで用事があつて42分に窺ふと，♀は管瓶のコルク栓の下面を足がかりとして脱皮を完了しやうとするところであつた。♂は今度は♀の腹部下面に廻り，先人の教ふる通りのカニグモ類一般の體型で交尾中であつた。暫くして♀が靜に歩を移す，♂は腹部背面へ後退する。コルク栓と硝子壁との境で♀は靜止すると再び♂は♀の腹部下面へまはつた。然し既に餘り熱心でなく。♀が動けば後退し，人の氣配がしても後退する狀態であつた。午後 9 時20分には♂は♀から離れてゐた。翌朝も離れてゐた。

自然狀態ならば其儘行逢ふ機會は無いのであらふが管瓶中であるから出逢ふそして♂は♀の背面へ，何等の躊躇なく上る，♀も反抗しない。が再び♂は自ら離れて行く。4 日の朝，♂は斃れてゐた。

更に 6 月 4 日に新な♀の亞成體を得たが，該個體は♂を脊負つてをらず，6 日の午後脱皮した。

筆者は寡聞未だこれに類似した場合を知らない。*Lycosa* 屬では♂は♀の頭胸部に躍り，其の體型で交際し，♀は♂を負つたまゝ移動する事が知られて居る。これと全然科を異にする *Micaria* 屬に於て同様な體型を昨年筆者は觀察した。併し何れも♂♀共 adult である。

♂が先に成熟して亞成體の♀の近くに止る例は蜘蛛界に頗る多い事は云ふを俟たない。

尙觀察者として，亞成體の♀が自己の腹部背面に♂が登つてゐる事を許す事と，♂が亞成體の♀であつても決して其の位置を離れやうとしない點より推して上記の習性が固定され，完成されたものと考へてゐる。

尤も過去の採集例や，4 日の採集例よりして，この習性が性性の總ての場合であるとは思はない。諸賢の御協力を得て，更に多くの機會を摑みたいと念ずるものである。